空の青さ

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の青さ

【Ｎコード】
Ｎ９７４０Ｌ

【作者名】
きみよし藪太

【あらすじ】
胸が痛い。
君が気になりはじめてから。
授業を抜け出してコンビニの駐車場に逃げたのは、看板の色が空の色と同じだったから。
君を好きになるということ。
自分が自分でなくなるようで、わたしは男の子になりたいと思ってしまう。

世界の終わりに。
あなたとくちづけていたい。
ただ、それだけ。
そんな願いが叶えられないのなら、今すぐわたしの生命は神様とかいう会った事もない、そしてこれからも知らないで居続ける誰かにあげる。

痛い、胸が。

「岸井が、何だって？」
翻るスカート、風の悪戯、それは真っ青な空の下。
「岸井が、」
「一度言えば聞こえるってば」
短く刈り上げた髪はそこらの男の子よりも短い。わたしは男になりたかった人間なので、中学校の紺色プリーツ膝下スカートは腹立たしくてならない。誰が決めたんだろう、女はスカートを穿かなくちゃならないなんて。
「岸井があんたの事、好きだって」
風に遊ばれる真っ黒いわたしの髪、白いうなじはまだ空気に慣れない生まれたてのヒヨコみたいに震えている、きっとそんな感じ。
「岸井が？　誰を？」
「あんたを」
何度も言わせないで、の、意味を込めて睨み付ける、わたしの視線を刃に変えて、こいつを切り裂けたらいいのにと時々けれども真剣に思う。

胸が、痛い。

放課後も待てないまま校舎を飛び出した。青い空の匂い、同じ色の看板を掲げたコンビニの、裏側にしか隠れていられない子供で臆病な自分を笑う。ダンボール箱を蹴飛ばして、スカートの裾をぐいぐいと引く。上手く言えないもどかしさが、空気に溶けてそれをまたわたしが吸ってしまう。

男の子になりたかったのことに、意味なんてなかった。ただ、小学校卒業間際になってしまった生理だとか、少しずつ膨らんでくる胸だとか、そういうものが恐かった。男だったらずっと変わらなくて済むのに、確実に女へと変化していく自分の身体に戸惑ったりしなくて済んだのに、なんて思うのは、男じゃないから簡単に言えてるだけなんだろうか。

同じクラスの樫本が、わたしの隠れているコンビニの裏にやってきたのは、飛行機雲がまだくっきりと残っているぐらい、時間の経たない頃だった。

あ、と思って。

逃げようかな、なんて考えたけれど、結局そこに居続けた。

「何してんの」

驚いた顔もせず声もせず、樫本が声をかけてきて、わたしは少し俯いてみたりする。なんでこんな所で会っちゃうのかな、なんて唇を噛んでみたりする。

わたしが一番男になりたい理由。

樫本が、気になり過ぎる、そんなのって変だろうか。

「数学やってるよ」

他人事みたいに樫本が言って、学校の方を指差した。わたしはつられてその指先に視線を這わせ、慌てて自分の足元にまた目を戻す。

「ガッコ、行かないの？」

あんたこそ、と小さな声で言ってみる。

どうしてわたし、どきどきしてる？

樫本が気になる。
それが「好き」という感情なら、わたしは本物の女になってしまう。
それはまだ、ちょっと。
心の準備が出来ていない。

「杉原って、結構ガッコからいなくなってるよな」
こんなトコにいつもいんの、と樫本が聞く。
頷いていいのか、いまいち分からないままだったら返事をするタイミングを逃してしまった。
「なんでそんな短い髪してんの？」
「……文句がある？」
「ない、可愛けりゃ女なんて何でも良い」
女なんて、の言葉に腹が立った。
可愛けりゃ、の言葉に胸が鳴った。

太陽の匂いがする、樫本は。
色が黒くて、目付きが悪くて、サッカーが好きらしくて、そして嘘をつかない。
わたしは樫本をあまり知らないけれど、それだけはちゃんと知っているので胸を張って言える。

「岸井があんたの事、好きだって」
同じクラスのやたらと自信過剰の、けれどもやたらと綺麗でもある女の名前を言ったのは、どちらかと言えば口にしたい話題ではなかった。沈黙が苦手な訳でもなかったけれど、何か言わないと樫本が退屈してどこかへ行ってしまうのではないかと恐く思う、そんな気持ちはあった。

少し血色の悪い樫本の唇。

キスを、したことはまだ一度もない。誰とも、ない。
わたしの唇はまだ処女で、甘いのか苦いのか自分では分からない。
あの樫本の唇、その味はどんなだろう。
そう考えるのは、いやらしい気がして、けれども胸がときめく。

胸が、痛い。
樫本の傍にいると。
それは、甘い棘のようだ。
刺したままにしておきたい、いつか綺麗な花を咲かせるだろう、生きている棘。
この気持ちに名前を付けたら、わたしは自分が女になってしまいそうで、それが怖い。
「金、持ってる？」
「え、持ってない」
「……じゃあなんでコンビニに居んの」
意味ないじゃん、と樫本が笑う。目が細くなる。
「……看板が、」
馬鹿にされるだろうか。
「あの、空と、同じ色だから」
一瞬考えるような顔をして、樫本が空を仰いだ。
「ああ、青いね」
首を上手に動かし、看板の方をぐるりと見てから目線を元に戻す。
「空、好き？」
「え、」
「だって、空と同じ色の看板、嫌いだったらこのコンビニに来ないだろ」
そういう意味だったらさ、と言ってから、どういう意味だろう、と勝手に樫本は首を傾げた。
「俺、金持ってる。何か飲む？」
「店内、入るの？」

「……外の自販機でも良いけど」
「だって、」
制服のままで、店内に入ったら店員が学校に連絡してしまわないだろうか。何度も姿を見られていて、それでも平気なのにわたしはそう思う。わたしが呼び出されたり怒られたりするのは別に良い、だけれど、樫本が怒られたりするのは、なんだか嫌だ。
「杉原って、」
変な奴、と言われるのかと思っていたけれど、違った。
少しの間を置いてから、樫本はその首、とわたしを指差した。
「白いのな、色。こんなトコでサボってばっかいる割には、日に焼けないのな」
「……樫本は色黒いね」
「地黒だ、文句あるか」
「ないよ、別に、あんたの肌の色が白だろうが黒だろうがピンクだろうが紫だろうが何だって良いよ」
「……紫、は嫌だな、変な病気っぽくて」
紫色はわたしが好きな色で、なんだか自意識過剰にも自分を嫌いと言われている気分になってしまった。馬鹿みたいに、思い直す、確かに紫色の樫本はちょっと、いや、かもしれない。

いつから彼が気になり出したのだろう。
覚えてもいないなら、それはきっと本当に気になっているという事なのだろう。
始まりはいつの間にか知らずのうちに訪れるもの。
終わりほど潔くきっぱりしていない、臆病な子供がドアの隙間から顔をほんの少し覗かせるのと同じように、ゆっくり、ひどくゆっくり。
始まりは、いつだってそうやって恐る恐るやってくる。
「……痛い」

「は？　なに、ケガしてんのか」
「ううん、」
胸が、と言うと、樫本が不思議そうな顔をした。
「胸？　病気？」
「違うよ、」
思ったより強い口調の言葉が出てくる。
「違うよ、」
繰り返す同じ言葉に、どんな意味を拾ってくれるだろう。
「違うよ、……病気じゃなくても胸が痛む事はあるよ」
「ああ、そういうのなら知ってる、俺も時々ある」
「え、」
未来を考える時も、成長する自分を自覚してしまった時も、戸惑いを感じて上手に息が出来なくなって胸が痛むよ、と平然とした顔のまま樫本が言った。
「杉原もそんなん？」
「……わたし、は、」
樫本と同じなのかそれとも違うのかよく分からなかった。
ただ、壁にもたれたままのわたしを覗き込んでくる樫本の顔が陰になって、今まで瞼の部分なんかで受けていた陽の光が彼の髪に吸収されてしまって、微妙に涼しく感じた。
「わたしは、」
樫本の目がわたしを見ている。
唇。
何か言いかけて軽く開いて、そしてゆっくり閉じられる。
何を言いかけているのか、知りたくてけれども何も聞きたくない気もする。
樫本の、唇。
わたしの目は、そこから離れない。
「痛い……」

なんて弱いんだろうと思いながらわたしの瞳から涙がこぼれた。
それはひどく熱くて、どうしようもないほど苦かった、唇の端に吸い込まれて口内に入ってきてしまったので、思わず眉を寄せたぐらいだ。
苦い。
この胸が痛む、それはなんて苦い気持ちなんだろう。
こんな想いをして、すべての人は成長するのだろうか。
そして、どこへ行くんだろう。
大人になるのは、難しくて痛くて苦い。
「杉原？」
疑問系の呼びかけは次に怒ったような声に変わった。
「杉原、」
違う。
怒った顔じゃない、困っている顔だ。
樫本が強い声を出して、わたしは驚いて顔を逸らしかけた、でも彼の唇ばかりが気になって、視線は動かないままだった。
キス。
ぶつかってきたのは唇。
したことがなくてもはっきり分かる、下手くそなくちづけだった。
ただ、鼻先が太陽の匂いを拾った。
樫本、とわたしは呟く。
太陽の匂いがするよ。
樫本。
あなたから、太陽の匂いが。
くちづけに永遠が見えるなんて嘘だった。なんの歌だっただろう、なんの本だっただろう、永遠なんてちっとも見えなかった。唇はあまりにも早く離れ過ぎてしまって、後にはぶつかってきた衝撃と重なっていた感触だけが残っているだけだった。
くちづけ。
甘くもなかった、苦くもなかった、ただ、そこに確実に存在して

いる自分を知った。
ただ、そこに確実に存在している樫本を知った。

胸が、痛い。
樫本を気にし続ける気持ちは、いつまで取っておいておけるのだろう。

「……帰るか」
「学校？」
「うん、ガッコ」
ええっと、と逃げ出したがっているとはっきり分かる樫本がわたしを一度だけ真っ直ぐ見て言った。
「俺、岸井より杉原のが女として見れる」
「え、」
短いわたしの髪。黒くて男の子みたいで、そして実際男の子に憧れるわたしを、彼は女として見る事ができるという。
「……あ、うん、」
わたしを女にしてしまうのは、膨らみはじめた胸でもなく、汚れた血に染まる下着でもなく、子供を産めるようにと成長していく身体でもなく、ただひとつだけ、好きな男からの言葉、そして眼差し、その唇、そんなものなのだと突然気付いた。それだけが、どんなにわたしが拒んでいようとも、わたしを女にしてしまうのだ、きっと。
「あんまサボると呼び出し食らうぞ」
「うん、……うん、ね、樫本」
「なんだ」
「今度、ジュース奢ってね」
拍子抜けした顔で、樫本が一度頷く。
この人が好きなのだと、認める事にしたら胸の痛みが甘さを帯びた。この世界が終わる時に、わたしは樫本とくちづけていたいと今だけかもしれないけれど真剣に思った。

わたしを女にしてしまう、この男と。
わたしを女にしてしまう、この想いを込めて。
くちづけていたいと、願った。
それが幼い、すぐに変わってしまう刹那の願いだったとしても。

「帰るぞ、」
「うん、」
コンビニの看板は、ひどく高いところにあるあの空と、本当に同じ色をしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9740l/

空の青さ

2010年10月8日14時42分発行